Osaka University Knowledge Archive

Title	行動の解釈が被透視感を感じる側面に与える影響 : シャイネスとの関連
Author(s)	太幡, 直也; 押見, 輝男
Citation	対人社会心理学研究. 2004, 4, p. 141-146
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5075
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

行動の解釈が被透視感を感じる側面に与える影響 1) 2)
ーシャイネスとの関連ー

太幡　直也（筑波大学大学院人間総合科学研究科）
押見　輝男（立教大学文学部）

本研究では、自己の内面が見抜かれているという感覚である被透視感と、行動の解釈の関係を検討することを目的とした。本研究では、行動の解釈に影響を与える要因としてシャイネスを取り上げた。回答者には、回答パターンが自己の特徴を反映しないような葛藤課題の解決方法に回答してもらい、回答の結果からどの程度自己の特性が見抜かれてしまうかを評定してもらった。シャイな人はシャイでない人よりも、ネガティブな特性については見抜かれている程度を高く評定したのに対して、ポジティブな特性については見抜かれている程度を低く評定していた。このことから、自己の行動の解釈に影響を与える要因が、内面が見抜かれているという感覚の強さに関連することが示唆された。

キーワード：被透視感、行動の解釈、シャイネス、葛藤課題

近年、自己の内面に対して社会的認知のアプローチを用いた研究が着目されてきている(e.g., 遠藤, 1993)。その中で、自己に向けられる他者からの注目度を解釈する際に、他者に注目されている程度を過大評価することが論じられている。例えば、Fenigstein(1984)は、他者の行為を観察したときに、その行為が自己に仕向けられたものであると過度にみなすバイアスが存在することを示した。また Gilovich, Medvec, & Savitsky(2000)は、自分の行動が実際よりも他者から注目されていると考えてしまうバイアスが生じることを示した。

Gilovich, Savitsky, & Medvec(1998)は、他者に注目されている程度の過大評価は、自己の外面についてだけでなく自己の内面についても見られることを示した。彼らは、他者に隠そうとしている感情や人前で話したウソについて、実際に相手が気づいている程度よりも他者に見抜かれてしまっていると推測してしまうバイアスが生じることを実験により示し、このバイアスを透明性の錯覚(illusion of transparency)と名づけた。

これまでの研究において、自分で意図的に相手に伝えようとしていない自己の内面について、他者に見抜かれているという感覚は、自己の内面が外に漏れ出してしまうという自我漏洩感のような病理的側面から主に検討されてきた(e.g., 丹野・坂本, 2001)。しかし、佐々木・丹野(2003)による一般の大学生を対象にした調査では、大学生の多くの人が日常場面において、自分の感情や思考内容などの自己の内面が周囲の他者に伝わっていると感じることがあるということが明らかになった。また、Gilovich et al. (1998)が示した透明性の錯覚からも、相手に対して自己の内面が見抜かれているという感覚は一般の人の間で生起しうると考えられる。これらのことから、自己の内面が他者に見抜かれているという感覚は、病理以外のプロセスによって日常的に感じられることが想定できる。

本研究では「ある状況において、自分で意図的に伝えていないのに、相手に対して自己の内面が見抜かれていると感じる感覚」を被透視感と定義する。そして被透視感を生じさせる要因について検討を行う。

それでは、なぜ日常において病理以外のプロセスで被透視感を感じるのだろうか。Gilovich et al. (1998)は透明性の錯覚が生じる必要条件として、自己の内的状態が相互作用する相手に伝わってしまう手がかりが存在することを論じた。そして、自己の内面が見抜かれている程度を判断する際に、自分の行動の解釈が、相手が自己の内面を知るときの手がかりとなると論じた。また Van Boven, Kamada & Gilovich(1999)は、自己の態度を観察者が推測する状況では、観察者は表情などの周辺言語的な要因から行為者の本当の態度を推測するだろうと行為者に判断されていることを示した。これらのことから、他者に示した自己の行動や他者との相互作用が、被透視感を感じさせる要因になっていると考えられる。本研究では、自分の行動を手がかりとして他者にどのように見られているかを推論するときに生じる被透視感を検討する。

これまでの研究において、行為者の行動と内面の関連性については、行為者の意図や特性が行動に反映されていると観察者に知覚されるという、対応バイアス(correspondence bias)が存在することが示されてきた(Jones, 1979)。対応バイアスの研究は、他者の行動意図に対する帰属の研究として主に扱われてきた(e.g., Jones & Harris, 1967)。そして、状況によって拘束された行動からも、行為の意図が行為者の内的属性を反映したものであると知覚されやすいことが論じられてきた。

Vorauer(2001)は、対応バイアスと透明性の錯覚について、類似点の論考を行った。彼女は、2つの現象の類似点として、対応バイアスが行為者の行動から推論するものを反映している現象であるのに対して、透明性の錯覚は自己の行動から他者が推論すると予測するものを反映している現象であることを論じた。このことから、自己の行動によって他者が知ったと感じる自己の内面についても、自己の行動が内面を反映したものであると行動をとった本人に過大評価されることが想定される。そして結果として、被透視感を感じるようになると考えられる。

自己のとった行動が被透視感を生じさせているのならば、自己のもつ情報が顕現化しているときには、相手に示した行動を解釈する際に、顕現化している自己の情報が用いられやすくなり、被透視感が強まることが想定される。Vorauer & Ross(1999)や太幡(2003)は、自己の特徴が表れにくい行動のサンプルからであっても、自分自身に注意を向けやすい自己意識特性の高い人は低い人に比べて、自分のとった行動を通して、自己の特性が他者に見抜かれてしまう程度を強く感じることを示した。このような知見からも、行動と被透視感の関連性が示されている。

ところで、太幡(2003)は、被透視感をポジティブな内面とネガティブな内面に分けて検討し、被透視感がポジティブな側面にもネガティブな側面にも存在することを示した。そして、自己意識特性の高い人はポジティブ被透視感にもネガティブ被透視感も強く感じることを示した。個人の判断や行動は自己内で利用可能性が高い内容に影響を受けやすいため、自己の行動の解釈は自己概念と密接に結びついている(Markus & Wurf, 1987)。本研究では、自己意識特性の他にポジティブ被透視感とネガティブ被透視感のそれぞれの強さに影響を与える要因として、自己認知に影響を与えるシャイネス(shyness)という個人差要因を取り上げて検討を行うことを目的とする。

シャイネスは、対人的評価の予想から生じる社会的不安とそれに伴う対人的行動の抑制を伴う症候と定義されている(Leary, 1986)。シャイネスが自己認知に影響を与えることがいくつもの研究で示されている。例えば、Jones & Briggs(1984)は、シャイな人は相互作用する相手が自分を否定的に見ることを予期していることを示した。栗林・相川(1995)は、シャイな人は相手からポジティブに認知されていないと思っていることを示した。こうした知見から、シャイな人は自己をネガティブに見るという特徴があることが明らかになっている。

以上の知見から、シャイな人は自己をネガティブに認知するため、シャイでない人に比べて同じ自己の行動であっても自己のネガティブな側面を反映したものとして捉えるであろうと想定される。すなわち、シャイな人の自己の行動の解釈は、シャイでない人に比べてネガティブになることが想定される。

これまでの議論を総括すると、自己の行動の解釈が被透視感に関わってくるならば、シャイな人は自己のネガティブな側面の方がポジティブな側面よりも相手に見抜かれていると感じると予測できる。一方、シャイでない人は自己のポジティブな側面の方がネガティブな側面よりも相手に見抜かれていると感じると予測できる。

以上の予測から、本研究では以下の仮説を立てた。すなわち、「仮説1：シャイネス特性が強い人は弱い人に比べて、ネガティブな特性が見抜かれている程度を高く評定するだろう」「仮説2：シャイネス特性が強い人は弱い人に比べて、ポジティブな特性が見抜かれている程度を低く評定するだろう」である。

方法

対象者

都内私立大学の学生211名(男性72名・女性139名)に対し、質問紙実験の形式で、授業中に質問紙を配布し、一斉に回答してもらった。対象者の平均年齢は19.65±1.58歳であった。

独立変数

独立変数は、シャイネス(高・低)×被透視感を感じる特性(ポジティブ・ネガティブ)の2要因の混合計画であった。シャイネスの強さは、Cheek & Buss(1981)の社交性の側面を除いた部分を邦訳したシャイネス尺度(中村, 2000)の14項目を用い(例:よく知らない人たちと一緒にいると緊張してしまう)、尺度得点によりメディアン分割して実験条件とした。

手続き

本研究はVorauer & Ross(1999)を追試する形式で行った。「大学生の性格と対人行動の選択方法の調査」と称して、授業中に質問紙を配布し、一斉に回答してもらった。最初に、実験参加者に3つの人間関係における葛藤場面を文章で提示し、それぞれの場面における解決方法を4択の中から1つ選んでもらった(Table 1)。葛藤場面はVorauer & Ross(1999)を参考にして、雇用者場面・約束場面・恋愛場面を設定した。場面の回答の順序効果を考慮して、6通りの質問紙を用意した。予備調査において、ほとんどの人が4つの選択肢のうちの2つから解決方法を選択することが確認されていた。それぞれの場面の解決方法はその後、従属変数と性格特性に関する項目を含む質問項目について回答してもらい、その場で回収し

た。

従属変数

被透視感を感じる特性の選定のために、36 個の形容詞について 22 人の男女大学生を対象に「その形容詞が表す特性はポジティブなものか、ネガティブなものか」について5件法で事前に回答してもらった。回答結果により、ポジティブな特性を表す形容詞10項目、ネガティブな特性を表す形容詞 10 項目、中性的な特性を表す形容詞6項目を選定した。本研究においては、「先ほどの場面の解決方法を見た他者があなたの性格について判断するとしたら、どれくらい正確に見抜かれてしまうと思うか」という質問に対して、5 件法で回答してもらった。評定の選択肢は、「1:全く見抜かれない／2:ほんの少し見抜かれてしまうかもしれない／3:やや見抜かれてしまう／4:かなり見抜かれてしまう／5:ほとんど見抜かれてしまう」とした。

結果

独立変数の信頼性の検討

独立変数としたシャイネス尺度の信頼性を算出したところ、α=.89 であったため、十分な信頼性が得られたと判断した。

シャイネスによる場面の選択の違い

シャイネスの高低が葛藤場面の選択に違いを与えていないことを検討するために、それぞれの場面ごとにシャイネス高群(n=112)と低群(n=99)について葛藤場面の選択の度数を比較した。雇用者場面・約束場面・恋愛場面において、シャイネスの高低について有意な差は見られなかった($\chi^2(3)$=3.94, 3.69, 3.23, n.s.)。よって、シャイネスの高低によって、葛藤課題の回答パターンには違いは見られなかった。

被透視感の強さ

26 項目の特性について、回答者が実際に被透視感を感じていることを確認するために、26 項目の平均値を算出したところ、M=2.62(SD=.52)であった。この値は、本研究で用いた尺度では、「1:ほんの少し見抜かれてしまうかもしれない」と「3:やや見抜かれてしまう」の間であった。また、26 項目それぞれの平均値は 2.00 を超えていた。以上の結果から、本研究の状況で、回答者はある程度の被透視感を感じていたことが確認された。

被透視感を感じる特性についての因子分析

従属変数である特性 26 項目について、主因子法による因子分析を行った。その結果、累積寄与率より 2 因子構造による解釈が最も適当であると判断した。また、「おとなしい」「のんきな」の 2 項目の因子負荷量がそれぞれの因子に対して.30に満たなかったため、この2項目を除いて因子数を2に指定して再度因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った(Table 2)。2 因子の固有値はそれぞれ5.76、4.10であり、累積寄与率は41.10%であった。第1因子に負荷が高い項目は、「暖かい」「感じのよい」「意欲的な」などのポジティブな内容と考えられる特性であったため、第 1 因子はポジティブ被透視感因子(α=.87)と命名した[3]。第2因子に負荷が高い項目は、「無責任な」「だらしのない」「不親切な」などのネガティブな内容と考えられる特性であったため、第 2 因子はネガティブ被透視感因子(α=.82)と命名した。両方の因子項目をそれぞれ合算して項目数で割り、項目得点を求めた。ポジティブ被透視感因子の項目とネガティブ被透視感因子の項目の相関を算出したところ、有意な相関は見られなかった(r=.10, n.s.)。

シャイネスと被透視感の関係

被透視感の強さを従属変数として、シャイネス(2)×被透視感を感じる特性(2;ポジティブ・ネガティブ)の 2 要因の分散分析を行った(Table 3, Figure 1)[4]。その結果、被透視感を感じる特性の主効果(F(1, 209)=56.75, p<.001)と、交互作用(F(1, 209)=27.23, p<.001)が有意であった。しかし、シャイネスの主効果には有意な差は見られなかった(F(1, 209)=2.61, n.s.)。

シャイネスと被透視感を感じる特性の交互作用が有意であったために、単純主効果検定を行った。ポジティブ特性については、シャイネス高群の方がシャイネス低群よりもポジティブ被透視感が弱かった(F(1, 209)=21.15, p<.001)。ネガティブ特性については、シャイネス高群の方がシャイネス低群よりもネガティブ被透視感が強かった

Table1 対人関係の葛藤課題の例(約束場面)

あなたはAさんという友人に明日遊ぼうと誘われました。OKしたのですが、後で手帳を見たらBさんという他の友人と遊ぶ約束をしていたことを思い出しました。あなたたち3人は小さいときからの幼馴染みですが、AさんとBさんは以前に大ゲンカをしており今は2人とも口も聞かないくらい仲が悪くなっています。あなたはこれまでも二人を何度も仲直りさせようとしましたが、いつも失敗に終わり今では諦めています。さてあなたは明日どうしますか。
・重要な用事ができたとウソをつき、2人どちらとも遊ばないだろう
・Aさんには本当の理由を正直に言って断り、先に約束していたBさんとの約束を優先するだろう(○)
・Aさんには本当の理由を言わずに断り、先に約束していたBさんとの約束を優先するだろう(○)
・自分が遊んで楽しいのはどちらかを考え、そちらの約束を優先するだろう
※○がついているものが予備調査において常識的な解決方法とされた

Table2 被透視感を感じる特性の因子分析(プロマックス回転後)

	ポジティブ被透視感	ネガティブ被透視感	共通性	*M*	*SD*
暖かい	**.74**	-.09	.54	2.76	1.11
意欲的な	**.71**	-.04	.51	2.93	1.21
感じのよい	**.70**	-.01	.50	2.82	1.14
包容力のある	**.70**	-.15	.50	2.63	1.14
元気な	**.68**	.09	.50	2.81	1.27
清潔な	**.66**	-.03	.44	2.73	1.13
温厚な	**.63**	-.11	.41	2.97	1.16
責任感のある	**.63**	-.19	.42	3.00	1.12
感受性のある	**.54**	.29	.38	2.92	1.15
おしゃべりな	**.53**	.12	.33	2.50	1.25
洞察力のある	**.49**	.02	.24	2.73	1.22
生真面目な	**.45**	-.19	.22	2.96	1.22
大胆な	**.32**	.16	.16	2.52	1.20
慎重な	**.32**	.07	.10	3.05	1.21
無責任な	-.16	**.72**	.53	2.51	1.18
不親切な	-.22	**.69**	.51	2.17	.94
だらしのない	.06	**.69**	.46	2.27	1.10
冷たい	-.08	**.61**	.38	2.40	1.12
不満そうな	.04	**.59**	.35	2.43	1.11
落ち着きのない	.25	**.54**	.41	2.36	1.24
非論理的な	.12	**.48**	.23	2.50	1.18
うぬぼれた	.21	**.46**	.24	2.34	1.13
暗い	-.13	**.44**	.18	2.10	1.12
臆病な	-.03	**.38**	.14	2.55	1.19
回転後の負荷量平方和	5.17	3.52			

因子間相関

	ネガティブ被透視感
ポジティブ被透視感	.04

($F(1, 209)=4.78$, $p<.05$)。また、シャイネス低群では、被透視感を感じる特性の強さに差が見られ($F(1, 209)=76.59$, $p<.001$)、ポジティブ被透視感の方がネガティブ被透視感よりも強いことが示された。シャイネス高群でも、ポジティブ被透視感の方がネガティブ被透視感よりも強かったが、その差には有意傾向しか見られなかった($F(1, 209)=2.86$, $p<.10$)。

考察

本研究の目的は、ポジティブ被透視感とネガティブ被透視感のそれぞれの強さに影響を与える要因として、シャイネス特性について検討するものであった。仮説1は、シャイネスが強い人は弱い人に比べてネガティブな特性が見抜かれている程度を高く評定することを予測したものであり、仮説2では、シャイネスが強い人は弱い人に比べてポジティブな特性が見抜かれている程度を低く評定することを予測したものであった。分析の結果、仮説1、仮説2ともに支持する結果が得られた。

また、ポジティブ被透視感とネガティブ被透視感の強さを比較したところ、ポジティブ被透視感の方がネ

Table3 被透視感とシャイネスの関連

		ポジティブ被透視感	ネガティブ被透視感	合計
シャイネス高	*M*	2.60	2.46	2.53
(n=112)	*SD*	.68	.73	.54
シャイネス低	*M*	3.04	2.25	2.64
(n=99)	*SD*	.71	.64	.51
全体	*M*	2.81	2.36	2.58
(n=211)	*SD*	.73	.69	.53

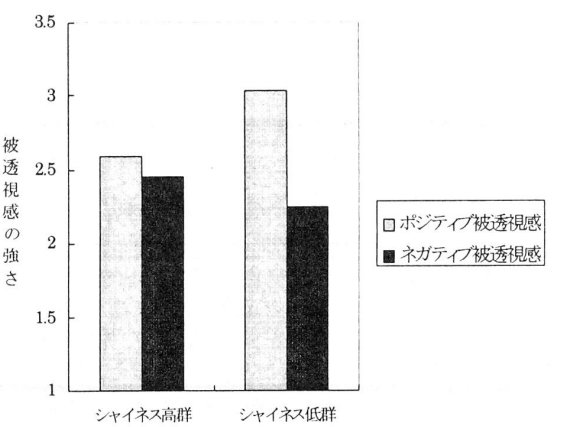

Figure1 シャイネスと被透視感の関連

ガティブ被透視感よりも強いことが示された。ポジティブな側面の方がネガティブな側面よりも被透視感を強く感じられたという結果は、同じ手続きを用いて自己フォーカスと被透視感の強さを検討した太幡(2003)と一致する結果であった。そしてシャイネスの高い人においても、ポジティブ被透視感の方がネガティブ被透視感よりも強い傾向が示された。この結果は、実験実施上の問題とポジティブな特性に対する認知的バイアスの点からの説明が可能であると考えられる。

まず、実験実施上の問題の点からの説明である。本研究で用いた対人課題の解決場面の選択は最も望ましいものを選んでもらう形式であった。実験参加者の多くは常識的であると考えられる内容の選択肢を回答していた。よって、実験参加者が対人関係の解決場面の選択肢を回答したことにより、ポジティブな自己呈示を行ったと感じた可能性が考えられる。そのため、ポジティブな特性が行動に表れている程度を多く推測したことが推測される。

次に、ポジティブな特性に対する認知的バイアスの点からの説明である。Taylor & Brown(1988)は、人は、自己像をポジティブに捉えるという認知的バイアスを持つことを示し、ポジティブ幻想(positive illusion)と名づけた。回答者が被透視感について回答する際にポジティブ幻想が影響したため、ポジティブな特性の方が見抜かれていると感じやすかった可能性も想定される。

本研究から、シャイネスが被透視感を感じる側面に影響を与えることが示唆された。シャイネス傾向を持つ人は、初対面の人からの凝視を拒み神経質的な自己操作を行うといった、対人行動を抑制するという特徴を持っている(e.g., Cheek & Buss, 1981)。本研究の結果から、シャイな人が対人行動を抑制してしまう背景として、シャイネスが高い人が自己の否定的な側面が相手に伝わってしまっていると思うという心理過程が介在している可能性が考えられる。

また、本研究の結果から、自己の行動の解釈が被透視感を感じる側面を規定していることが示唆された。今後は、被透視感を感じたことによって生じる対人行動への影響について検討する必要があるだろう。

引用文献

Cheek, J. M. & Buss, A. H. 1981 Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, **41**, 330-339.

遠藤由美 1993 セルフに対する認知的アプローチの意義と課題 心理学評論, **36**, 545-564.

Fenigstein, A. 1984 Self-consciousness and the overperception of self as a target. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 860-870.

Gilovich, T., Medvec, V. H., & Savitsky, K. 2000 The spotlight effect in social judgment: An egocentric bias in estimates of the salience of one's own actions and appearance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 211-222.

Gilovich, T., Savitsky, K., & Medvec, V. H. 1998 The illusion of transparency: Biased assessment of other's ability to read one's emotional states. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 332-346.

Jones, E. E. 1979 The rocky road from acts to dispositions. *American Psychologist*, **34**, 107-117.

Jones, E. E. & Harris, V. A. 1967 The attribution of attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **3**, 1-24.

Jones, W. H. & Briggs, S. R. 1984 The self-other discrepancy in social shyness. In R. Schwarzer (Ed.), *The self in anxiety stress and depression*. Amsterdam: N. H.

栗林克匡・相川充 1995 シャイネスが対人認知に及ぼす影響 実験社会心理学研究, **35**, 49-56.

Leary, M. R. 1986 Affective and behavioral components of shyness: Implications for theory, measurement and research. In W. H. James, J. M. Cheek, & S. R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspective on research and treatment*, New York: Plenum Press.

Markus, H. & Wurf, E. 1987 The dynamic self-concept: A social psychological perspective. *Annual Review of Psychology*, **8**, 299-337.

中村陽吉 2000 対人場面における心理的個人差 ブレーン出版.

佐々木淳・丹野義彦 2003 自我漏洩感を体験する状況の構造 性格心理学研究, **11**, 99-109.

太幡直也 2003 被透視感の検討～他者の視点取得と自己意識特性との関係～ 日本グループ・ダイナミクス学会第50回大会発表論文集, 202-203.

丹野義彦・坂本真士 2001 自分のこころから読む臨床心理学入門 東京大学出版会.

Taylor, S. E. & Brown, J. D. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193-210.

Van Boven, L., Kamada, A., & Gilovich, T. 1999 The perceiver as perceived: Everyday intuitions about the correspondence bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 1188-1199.

Vorauer, J. D. 2001 The other side of the story: Transparency estimation in social interaction. In Moskowitz, G. B. (Ed.), *Cognitive Social Psychology : The Princeton Symposium on the Legacy and Future of Social Cognition*. Mahwah, NJ: Erlbaum. Pp. 261-276.

Vorauer, J. D. & Ross, M. 1999 Self-awareness and feeling transparent: Failing to suppress one's self. *Journal of Experimental Social Psychology*, **35**, 415-440.

註

1) 本研究は筆者の2002年度修士論文(立教大学文学研究科)の一部を改稿した。本論文の執筆にあたり、筑波大学心理学系山本眞理子教授よりご指導いただきました。心より感謝を申し上げます。

2) 本研究は、日本社会心理学会第 43 回大会(2002)において発表したデータを再分析したものである。
3) 中性的な特性を表す 6 項目の中で、「おとなしい」「のんきな」の 2 項目は因子分析から削除された。また、「おしゃべりな」「生真面目な」「大胆な」「慎重な」の 4 項目はポジティブ被透視感因子に含まれた。
4) 被透視感の強さに性差があることを考慮して、ポジティブ被透視感とネガティブ被透視感の強さについて男女差を比較したが、ネガティブ被透視感の強さには有意な差は見られなかったものの、($t(209)=1.28$, *n.s.*)、ポジティブ被透視感には有意な差が見られ($t(209)=2.08$, $p<.05$)、男子($M=2.95$, $SD=.75$)の方が女子($M=2.73$, $SD=.70$)よりもポジティブ被透視感が強かった。よって被透視感の強さに男女差があることを考慮して、被透視感の強さを従属変数として、性別(2)×シャイネス(2)×被透視感を感じる特性(2；ポジティブ・ネガティブ)の分散分析を行ったが、性別の要因が絡む交互作用はいずれも有意でなかった。

Effects which an interpretation of behavior has on the side of transparency: A relation to shyness

Naoya TABATA(*Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba*)
Teruo OSHIMI(*College of Arts, Rikkyo University*)

This study examines the relationship between interpretations of one's own behavior and the feeling of transparency—the sensation that one's inner self has been seen by others. Specifically, the study considers shyness as a factor influencing behavior interpretation. Participants were asked to solve conflict problems in ways that would not reflect their own characteristics. They were also asked to evaluate the extent to which their replies would reveal their characteristics. Compared to participants who were not shy, while participants who were shy rated that their negative characteristics as being more transparent, they rated their positive characteristics as being less transparent. Therefore, this study suggests that shyness influences interpretations of behavior and that this is related to the feeling of transparency that one's inner self is revealed.

Key words: feelings of transparency, behavior interpretation, shyness, conflict problems